

追悼 三浦玲一 中山徹

本特集は、二〇一三年秋に四七歳で世を去った、一橋大学大学院言語社会研究科教授、三浦玲一に捧げられる。

この特集を構成する四つの論考が出そろったとき、わたしは安堵とともに、切なさを感じていた。この特集は、愛する対象の喪失への反応、つまり喪の営みとしての意味をもっている。しかし、この特集を誰よりも先に届けたい、そして真っ先に感想を聞いてみたいひとは、失われた対象、三浦玲一そのひとなのである。これは寄稿者のだれもが感じていることだろう。喪失を埋めるはずの営みは、喪失感を増幅する。それが追悼特集というものの宿命なのだろう。

彼の指導教官であったウォルター・ベン・マイケルズは、わたしに送ってくれたメールのなかで、「レイ（三浦玲一）の愛称はすばらしい批評家だった（Ray was a brilliant critic）」と評している。この評言の含意は多様であろうが、わたしは、それを次のような意味で解したいと思っている。三浦玲一は、ポピュラーなものを前にして、なぜそれがポピュラリティを獲得したのかを説明することを自らの責任として引き受け、その責任をみごとに果たしたのだ、と。実際、彼がとくに晩年、解釈の俎上にのせた対象は、村上春樹、宮崎駿、『タイタニック』、『ブリキユア』、AKB48……要は、ポピュラーな文化と呼んでよいものなのである。（彼が闘病生活のなかで愛読していた本のひとつは、世界的な大ヒット漫画『ドラゴンボール』であったという。わたしにおける「批評家」三浦玲一のイメージ形成には、このことを聞かされたときの感慨も影響していると思う。）ただし彼の文化批評の核には、文化への愛とともに、つねに「社会的なるものへの意志」とよぶべきものがあつた。彼が「リベラリズムの文化」として問題化したのは、「社会的なるもの」を抑圧する力のことであり、遺著『村上春樹とポストモダン・ジャパン』において説かれている「リアリズムの復活」は、その抑圧への批判が要求する、必然的な文学のあり方であつた。四つの論考に共通の姿勢があるとすれば、それは三浦玲一の「社会的なるものへの意志」に批判的かつ共感的に応答することである、といえるだろう。

三浦玲一が「すばらしい」のは、批評家としてだけではなかった。彼はわたしたちにとって「すばらしい」教師であり同僚であり研究仲間であり友人であった。さらに brilliant という語の原義（「輝かしい」）をふまえれば、彼のパーソナリティに対してもこの形容詞を使ってよいかもしれない。彼と交友のあったひとなら同意してくれると思うが、彼は端的に言って「明るい」ひと、わたしが先に述べた「切なさ」など似合わない「明るい」ひとであったからだ。あるひとが、酒に酔ったときの彼の口癖を覚えてくれた——「ねえ、なんか面白いことないの？」彼を知る人なら、彼がこの言葉をいうときのうれしそうな顔が思い浮かぶはずである。

わたしはこの特集が彼にとって「面白い」ものになっていることを願う。